

抱負胸に学生生活

産大・工科大 期待込め入学式

柏崎刈羽のトップを切っ
て1日、新潟産大（梅比良
眞史学長）の入学式が同大
講堂で開かれた。3日には
新潟工科大（田辺彩葉学長）
の入学式が行われ、両大学
構内では満開の桜がスーッ

姿の新入生たちを出迎え
た。入学生代表がこれから
始まる学生生活に向け、
「知識の習得」「社会から
必要とされる技術者を目指
す」など力強く抱負を述
べた。

◆
新潟産大の新入生は経済
学部60人、2年次転入1
人、3年次編入1人、大学
院修士課程7人。また通信
教育課程の「ネットの大学
manager」に37

4人。
式辞で梅比良学長は今年
から1年次の基礎ゼミが過
2限に拡大されることから
「基礎ゼミのフィールドワ
ークを通じて主体的に社会
と関わって学び、卒業後、

日本中、世界中のどこに行
っても自分が身を置く地域
で豊かに生き生きと社会に
貢献できる力を身につけて
ほしい」と呼び掛けた。こ
れに答えて入学生代表の江
尻由來さんが「私たち入学
生一同は産大生として学則
を守り、幅広い知識を身に
付け、有意義な4年間を送
る」と誓った。

◆
新潟工科大は工学部に1
32人、3年次編入3人、
大学院修士課程に10人が入
学した。新任の田辺学長は
式辞で「工学は、社会との
関わりを常に意識し、その

上で社会で役立つ『もの』
や『こと』を創造するため
の科学と技術。また本質的
に鷹揚（おうよう）な学問
であり、これが本学の基本
理念の『産学共同』につな
がっている。今は知のプロ
フェSSIONナルが求められ
ている。明日の地域、世界
は皆さんの双肩にかかって
いる」と述べた。

新入生代表の渡辺彩葉さ
んは「社会から必要とされ
る技術者を目指し、4年間
の大学生活で専門的な知識
や技術を積極的に学びま
す」と決意を込めた。



新潟産大の入学式11日、同大講堂



新潟工科大の入学式13日、同大講堂

新潟産大「東洋史」

多彩な講師が オムニバスで

10日スタート

新潟産大は市民が学生と一緒に授業を受けることができる「聴講講座」の春学期受講者を募集している。全69科目のうち「東洋史」は一般財団法人ユーラシア財団 from Asia が助成する特別講座に2年連続で採択された。

国内外から多彩な講師を迎え、オムニバス形式で東アジアの歴史や文明、自然環境について幅広く学ぶ全15回。初回は10日午後2時55分から。昨年の春講座は学生108人のほか市民聴講生6人が受講し、好評を得た。また特別講座の講師たちが編さんした「東アジア理解講座―その歴史・文明・自然・環境―」（明石書店）が今月に出版される見込み。

聴講講座の各科目の詳細は同大ホームページに掲載。受講料は1科目1万円。問い合わせ、申し込みは同地域連携センター（電話24・8441）へ。

「新約座す」 地域に学ぶ 地域を学ぶ

— 実践活動レポート —

地域連携広報誌 『ローカレッジ』

座大生による地域連携活動広報誌『ローカレッジ』第15号が完成した。第1号を2015年10月に発行し、およそ年2回の発行を続けてきた。新型コロナウイルス禍では、発行ペースや編集方針の転換を強いられましたが、22年度は久々に1年間での号を発行することができた。本格的なデザインソフトを活用して、取材からDTPデザイン

までを学生自身で行っている。

最新号では、2月に開催した「柏崎冬のフェスティバル」や、「柏崎に関する研究発表会」で最優秀賞を受賞したまち研二大学共同プロジェクト「『当地す』くくかしワンダー」、また、柏崎常盤高校と座大生の連携活動についても紹介し、充実した内容となった。今春卒業した市橋舞紀さんは、座大OBで現在長野県木祖村の地域おこし協力隊として活動している菅原綾太さんのイン

タビュー記事を担当した。「取材を通じて、ゼミの先輩の活躍を知ることが出来てよかった。学生のみならずにも、いろいろな進路の選択肢があるということを知っていたとき、参考にしても良かったらうれい」と振り返る。

4年生の飯島康貴さんは、学園祭「紅葉祭」と学友会の紹介ページを担当。「学園祭の楽しい雰囲気や、これまでの活動をいかに分かりやすく伝えられるかを意識して作成した。文章だけでなくデザインや写真などにも注目して、記事を楽しんでもらいたい」と語った。



だいている。これからも『ローカレッジ』を通じて、地域でますますアクティブに活躍する学生たちの姿を伝えていきたい。最新号は順次、市内の公共施設等で配布予

定。バックナンバーについても大学サイトでご覧いただきたい。
経済学部准教授・権田 恭子
(同大学地域連携センター)

比 男子代表が市長表敬 市内で強化合宿 3年ぶり

水球

市内で合宿している水球のフィリピン男子代表チームの監督や選手らが14日、市役所を訪れ、桜井市長を



桜井市長を表敬訪問した水球のフィリピン男子代表チーム14日、市役所

表敬訪問した。来月の東南アジアが参加する国際大会

ターボクラブ柏崎（ブルボンKZ）と合同練習を積んでいる。

フィリピン男子代表による市内での合宿は2019年11月以来、2回目。前回合宿した際に、競技力向上につながるなど柏崎に好印象を持っていったという。来柏したのは選手やスタッフ17人で、20日まで柏崎アクアパークでブルボンKZや新潟産大と練習を積む。

この日は選手ら6人が市役所を訪れ、桜井市長と懇談。メンバーは合宿の合間には市内観光も楽しんでいることなどを報告した。桜井市長は柏崎の歴史などを紹介しながら、「合宿でいい時間を過ごしてほしい」と歓迎した。

監督のダレ・エヴァンゲリスタさん(44)は「環境も良く、ブルボンKZとより

実践的な練習ができて学ぶことが多い」と話した。主将のゴメス・タニジュニア

さん(42)は「フレンドリーでおもてなしを感じる。大会前にレベルの高い練習が

できている」と充実感をにじませた。

任命式を終えて早速、活動方針や計画を話し合う学生広報チームII新潟産大会議室

の任命式を行った。新メンバー2人を含む2、4年生の男女8人が活動をスタートさせた。

広報チームは2020年9月に5人で発足し、3年目。梅比良学長は「皆さんが大学の代表として、誇りと自信を持って広報活動に当たってほしい」と期待を込め、一人一人に任命証を手渡した。

新潟産大 新メンバー加え 活動をスタート

学生広報チーム8人

新潟産大（梅比良真史学長）は14日、学生目標で大学の魅力をSNSで発信するため「学生広報チーム

新たに加入した3年・本間才揮さんは「来年の入学者が増えるように頑張りたい。書道部で地域行事に参加することもあり、そこで大学を紹介していきたい」と本田翔大さんは唯一の2年



生で「写真部だったので、これまでもデータ画像を学生広報チームのツイッター

で発信してきた」と自信をのぞかせた。

地域に学び、地域におこす 大

公開セミナー 28日 産

新潟産大で28日午後3時
〜5時に、公開セミナー
「今求められる教育と地域
連携の課題〜地域に学び、
地域におこす〜」が開かれ
る。会場は同大本館202
教室。参加無料。オンライ
ン視聴も可能。



AIの急速な進化や地球
環境問題の深刻化など大き
な社会変革の中で、大学教
育も知識伝達中心から、急
激な時代変化に対応できる
思考力、判断力、協働性な
ど総合的な人間力、社会人
力の育成へと変化が求めら
れている。

セミナーでは、今求めら
れる教育改革のあり方と
地域連携の課題、新潟産大
での教育改革の現状を報告
する。

当日は山本啓一・北陸大

教授が「高大接続時代にお

ける大学教育のあり方」、

阿部雅明・産大経済学部長

が「新潟産大大学の初年次

改革について」、住吉廣之

・新潟産大副学長（前松本

大学長）が「今求められる

大学教育と地域連携の課題

〜松本大学の取り組みから

学ぶこと〜」。

参加希望者は、26日午後

3時までに電話またはQR

コード別掲の申し込み

フォームから同大地域連携

センター（電話24・844

1、ファクス21・1366、

メールrenkei@ada.nsu.

ac.jp）へ。



新潟産大生とバスケットボールで交流するフィリピン男子代表チーム19日、同体育館

岩渥生君は「ジェスチャーや、知っている英語でコミュニケーションを取った。球際のうまさなど、さすが代表選手だと思った」と汗を拭いた。

ロイ・カニエラ選手(42)は「日本の若者と親睦を深めながら、競い合えて幸せだ」と笑顔を浮かべた。チームは20日まで10日間、アクアパークで同大水球部やアルボンウオーターポロクラブ柏崎と競技を重ね「練習はハイレベルで、もっと日本の選手から学びたい。体格差のある欧米のチームと戦っている日本代表の姿は、同じアジア人として誇りに思う」と敬意を表した。

フィリピン水球代表 学生と汗流し バスケットで交流

市内で合宿していた水球のフィリピン男子代表チームの監督・選手ら15人が19日、新潟産大を訪れ、学生とバスケットボールで交流。球技を通じ、選手と学生が親睦を深めた。

交流したのは、佐々木洋輔助教の「基礎セミナーⅢ」で学ぶ2年生13人。選手と混成で4チームを作り、総当たり戦を繰り広げた。フィリピンでバスケットは一番人気のスポーツ。幼い

頃から親しんできただけに、選手たちはキレのある動きを見せ、水球仕込みの鋭いパス回しも披露した。学生も全力プレーで応え、得点時はハイタッチを交わして距離を縮めた。湯

実りある学生生活を

産大・工科大 新入生合同歓迎会



新編産大・新潟工科大新入生合同歓迎会が26日、新潟県立柏崎市市民会館で開かれた。主催は市民、両大学で組織

した新入生歓迎会実行委員会（山田大介実行委員長。産大から67人と工科大から148人が参加した。

歓迎会は今年で18回目、市内の87個人・企業が協賛した。ステージは日本海太鼓の勇壮な「春の部」の演奏で幕を開けた。

桜井市長と西川正男・柏崎商工会議所会頭が歓迎のあいさつを行い、「柏崎の文化、えんま市や海の大花火大会などのさまざまな催しや行事を十分に楽しんでほしい」「市内の優れた会

産大・工科大新入生歓迎会で全員が参加して繰り広げた「クイズ柏崎発見」
26日、工科大

社を見学してぜひ学ぶ機会を」と呼び掛けた。

続いて、産大と工科大の学生による軽音楽の合同セッションが始まると、会場は大盛り上がり。アンコール曲までを奏しんだ。また「クイズ柏崎発見」ではチームに分かれて競い、「えちゴンは何歳か」などの難問（？）にも挑戦した。大花火大会の花火の本数は桜井市長のあいさつの中で解答が示されていたため、全員が正解だった。

会を締めくくって、田辺裕治・工科大学長が実行委員会に謝辞を述べながら、参加した新入生のこれからの羽ばたきに大きな期待を寄せて激励した。最後にお菓子のプレゼントなどがあり、新入生たちは思わず顔をほころばせた。

同実行委によると、新入生の出身地は市内より県内、県外出身者が多数を上めるなど、両大学が市の社会的な人口増加に大きく寄与していることが分かった。

産大レクチャー ●●● ア・ラ・カルト

〈186〉

日本経済の低迷がききやかれ始めて久しい。現在、世界第3位の国内総生産を誇る経済大国も、1人当たりになると（換算為替レートにもよるが）世界第30位前後を占める。アメリカと比較しても6〜7割程度を低迷している始末であり、どうも鼻唄（ひいき）目に見ても活気がない。かつての高度経済成長の

時代に生を享（う）け、Japan as No.1（ナンバー・ワン）の存在としての（日本）ともてはやされた頃に成長し、そしてその後のパブル経済の熱狂も体験してきた者にとつては歯がゆい限りである。しかし、現在の大学生にとつてはこれが生まれたときから変わらぬ「日本」であり、そして自然な「日常」なのであ

らう。
「最近の若者は…」と言いたくないのだが、一つ気にかかることは、彼らが大人たちに対してあまりに従順であるま

の心はまだまた萎縮したままなのであろうか。昔、フランスで経営学を学び、遊んでいたとき、友人と日仏の文化の違いについて話したことがあ

た私には、彼女の口からそのキュートな風貌にまったく似つかわしくない。そのような言葉が言い放たれたことがかなり意外で面白く、妙に印象に残

に見え、さらには、都会よりも田舎の方がこの傾向が大きいのでは、ということがある。スポーツでは世界を股にかけて活躍する青年が増えているが、経済の世界では人々

つた。フランス文化の特徴を聞かれた彼女は即座に、そして得意満面に「esprit critique」（批判精神）と答えた。批判イコール悪口、くらいにしか受け止めていなかった

っている。その後、経済学の世界に飛び込んで気が付いたことだが、社会科学において重要なことは、物事をさまざまな、そして独自の視点で眺めてみるこ

批判精神と地域創造

青木 隆明

とであり、その原動力となるのが、まさに「健全な」批判精神である。批判精神は多様な価値観を醸成し、多様性は自律性あふれる、そして強靱でしなやかな分権社会を構築する。
地域の抱える問題は万国共通であらうが、アメリカでは全国各地かなり不便な場所にキラリと光る大学があり、世界中から留学生がやってくる。フランスの片田舎には田園風景と教会以外に本當に何にもないが、人々に

は心なしか余裕があり、そこに暮らすことは自然で楽しい。日本でもそして柏崎でもそのようなことは可能なはずであり、目指してほしいと思う。打ち震えるような感性和批判精神は青年の特権である。懐（ふところ）深く彼らを受け止めるのは、社会科学であり、そして人文の教養である。と、手前味噌（みそ）ではあるが、強く感じる。
（准教授）
〓 毎月1回掲載 〓